

## 土器の底からわかること

### —土器底部圧痕—

大昔、縄文時代や弥生時代には、もっぱら土器を用いて煮炊きをしていました。こうした土器の底には、土器づくりの際に敷いてあった敷物や、たまたま下敷きになったモノの痕(圧痕)が残っていることがあります。

1は上高津貝塚から出土した縄文時代後期前葉〜中葉の土器で、敷物の跡がくっきりとついています。この敷物はおそらく、幅2〜3ミリの竹ヒゴを、「飛びござ目」という技法で組んだものです。土器製作の際、コース

ターのように底に敷いたと考えられます。つくりかけの土器が、地面にくっかないようにしたのでしょう。また、模様付けなどの際に、土器を回転させるためにも役立ちます。

2は、神立平遺跡から出土した縄文時代晩期前葉の塩づくり専用土器(製塩土器)です。半分以上が欠けているため分かりづらいですが、2ミリの太い葉脈と、そこから枝分かれする細い葉脈が確認できます。大きな葉っぱの裏面に粘土をのせ

て、土器の製作を行ったのでしょう。葉っぱのつるつるした面(表)を地面側にしていることから、やはり土器を回転させることを考慮していたのでしょう。

3は原田北遺跡で出土した、弥生時代後期の土器です。脱穀する前の、籾殻がついた状態のコメの痕が確認できます。土器づくりの際に、たまたま下敷きになったのでしょうか。土浦市でもっとも古い、米づくりの証拠です。

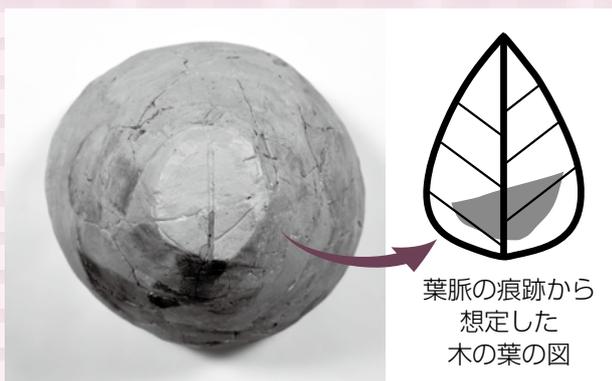
編み物や葉っぱ、コメなどの植物の遺物は、ふつう腐ってしまうので、なかなか残っていません。低湿地の遺跡で水漬けになっている場合は、植物質の遺物が残りますが、一般的な台地上の遺跡と比べて、低湿地遺跡は極めて少ないのです。そこで、考古学では古くから、こうした土器底部圧痕に注目し、当時の編み物の技術や、食べ物について研究してきました。普段は見えない土器の底には、失われてしまった情報が残されているのです。

近年では、こうした圧痕にシリコンを流し込んで型取りし、顕微鏡で観察する手法が開発されました。この手法によって、縄文時代にマメが栽培されていたことなど、新たな事実が明らかになっていきます。当館には、これまで調査されてきた豊富な考古資料が収蔵されていることから、これらの資料の再検討によって、新たな発見が生まれるかもしれません。

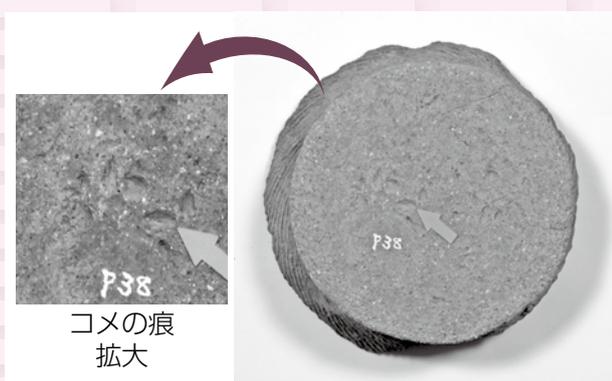
今回ご紹介した資料は考古資料館の常設展示室にて展示中です。ぜひご覧ください  
 上高津貝塚ふるさと歴史の広場  
 (0826・7111)



1. 縄文土器(上高津貝塚)



2. 製塩土器(神立平遺跡)



3. 弥生土器(原田北遺跡)

■発行 土浦市  
 〒300-8686 土浦市大和町9番1号  
 ☎029-826-1111  
 E-mail info@city.tsuchiura.lg.jp  
 HP http://www.city.tsuchiura.lg.jp/

■編集 市長公室広報広聴課  
 ■発行日 平成28年10月4日  
 ■人口と世帯数 14万0310人 5万7766世帯  
 (平成28年9月1日現在)

この広報紙は環境に配慮し、再生紙・植物油インキを使用しています。



次回「広報つちうら」10月中旬号は、10月18日(火)発行予定です。

スマートフォン用ホームページ▶

